

寺田博士と牧野博士のご縁

宮 英司

今年の朝ドラが「らんまん」……牧野富太郎博士の生涯を辿るものに決まった由。高知の牧野植物園や生誕地・佐川町は今から賑わいを見せているらしい。

寺田博士（1878～1935年）と牧野博士（1862～1957年）は同じ時代を生きている。この2人に関しては興味深い話が残されている。高知県越知町の横倉山自然の森博物館ニュースの「不思議の森から」（2006年1月号）を以下に引用する。（著者は当時の同博物館の安井敏夫副館長兼学芸員）

*

高知県出身の動物学（魚類学）の大家・田中茂穂博士がかつて東京の私電の中で、寺田寅彦博士と同車した際、たまたま土佐出身の人物の話になり、田中博士が「時に寺田さん、貴方は土佐出身者で誰を一番偉いと思えますか」と尋ねたところ、寺田博士はすぐさま「牧野富太郎」と答えたという。後日、田中博士が牧野博士に会った時、同じ質問をしたところ、牧野博士は直ちに「寺田寅彦」と答えたといわれている。



*

このことを裏付けるかのように寺田寅彦記念館の正門にある石碑の文字は牧野富太郎博士の直筆をもとにつくられている。「寺田寅彦先生邸址」がそれである。その下に名言「天災は忘れられたる頃来る」の御影石製の記念碑があり、これも牧野博士のものだろうと考えられている。

記念碑建設当時の新聞（1952年）を読んでみると、「いまは亡き偉人たちの業績をたたえて市と市文化財保護協議会が次々に建てることになっている記念碑はこの春、寺田寅彦、坂本龍馬、大町桂月の三人だけ除幕式をあげる運びとなった」とある。続けて「寺田寅彦は小津町の寺田寅彦記念館内に長さ6尺、幅2尺5寸の石碑を3尺の台座に横に据え、台座にも”天災は忘れられたる頃来る”と彫り込むことになっている。題字は市役所の公民課職員が東京在住の牧野富太郎博士に依頼するため上京する。」等々のことが記載

されている。(坂本龍馬は本丁筋1丁目(今の上町)南側の生誕地に、大町桂月は北門筋(今の永国寺町)の生誕地に記念碑が建立された由。)



牧野博士を顕彰する施設としては、高知県立牧野植物園がある。(牧野富太郎記念館も併設されている。牧野博士の銅像も建っている。)昭和33年の開園当初は小さな園だったが、近年の充実ぶりは目を見張るものがある。また、生まれ故郷の佐川町には牧野公園が整備され、生家跡には牧野富太郎ふるさと館ができています。他には、東京都立大学の牧野標本館や練馬区立牧野記念庭園などがあげられる。

比較する訳でもないが、寺田博士は寺田寅彦記念館と高知県立文学館の寺田寅彦記念室、それと平成30(2018)年完成の寺田寅彦銅像くらいのものである。たくさんの業績を残した寺田博士については、もっともっと顕彰する施設等が創られてもいいのではないだろうか。

寺田寅彦記念館の石碑の除幕式は、昭和27(1952)年の11月28日、博士の生誕75周年の日に挙行された。間もなくやって来る寺田博士の生誕150周年…令和10年(2028)年に、私たちはどのようにお祝いするか…。今から真剣に考えていかなければならないと思う。

*

事務局には、「牧野博士にあやかって朝ドラで寺田博士を取りあげてもらえるように運動していこう」とか「ぜひ、記念切手シールをつくってみよう」という声が寄せられたりしています。また、「生誕150年の記念碑づくり」や「寺田博士ゆかりの地ウォーキングの開催」などのご意見も届いているところです。

